

日本・トルコ友好一二〇周年記念
企画展

「海が結んだ日本とトルコ」
軍艦“エルトゥールル”の遭難事故から

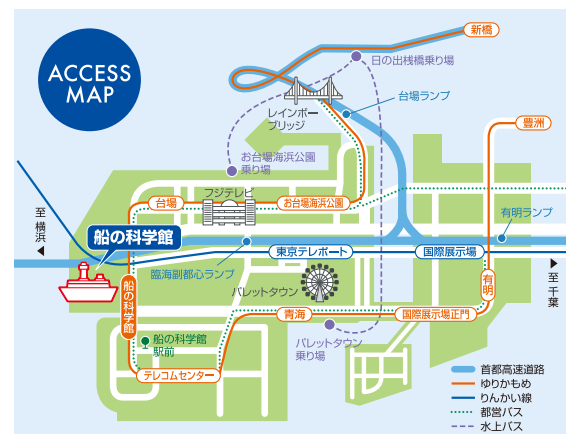


日本・トルコ友好120周年記念



エルトゥールル

*The Frigate "Ertugrul"
Japan and Turkey tied by Sea*



新交通「ゆりかもめ」
新橋駅(17分)・豊洲駅(14分)より
「船の科学館駅」下車

- りんかい線「東京テレポート駅」下車 徒歩12分
- JR「浜松町駅」より虹01「東京ビッグサイトゆき」
→ 都営バス 約20分
- 地下鉄東西線「門前仲町駅」より
海01 地下鉄有楽町線「豊洲駅」経由
「東京テレポート駅ゆき」→ 都営バス 約30分
- 車：首都高速湾岸線 臨海副都心・有明ランプ、
11号線台場ランプ
- 臨港道路(レインボープリッジ下層)お台場より



船の科学館

東京都品川区東八潮3番1号

TEL.03-5500-1111

開館時間 10:00AM~5:00PM

<http://www.funenokagakukan.or.jp>





御挨拶

1890(明治23)年9月16日、日本への親善使節を乗せたトルコ軍艦“エルトゥールル”は帰途台風に遭遇、和歌山県串本沖で沈没しました。600人近くが死亡する惨事のなか、遭難地点である大島の人々(現在の和歌山県串本町)の献身的救助と看護を受けた69人が日本海軍の“比叡”“金剛”により無事トルコに帰国しました。この遭難事故と救助活動を端緒として両国の親交が始まりました。

遭難事故から120年。本年は「日本・トルコ友好120周年」でもあります。本企画展では、両国友好の架け橋となった軍艦“エルトゥールル”にまつわる遺品をはじめ、現在に至る両国友好の流れを写真・模型などとともに紹介しています。御来場の皆様には、海を越えて結ばれた日本・トルコの交流史を知るきっかけとしていただければ幸いです。

最後になりましたが、開催にあたり貴重な資料の出展を御快諾下さいました所蔵機関各位、ならびに御協力いただきました関係者のみなさまに心よりお礼申し上げます。

船の科学館 館長

The Ottoman Frigate “Ertugrul”

“エルトゥールル”はどんな艦だったのか?

トルコ軍艦“エルトゥールル”は、オスマントルコ帝国後期、国力維持のため海軍の近代化が推進されるなかイスタンブールの帝立タシュクザク(Taşkızak)造船所で1855年に起工、1863年に進水しました(竣工は1865年)。

1864~'65年にはイギリスで機関・ボイラー・電気照明が増設されています。トルコが露土戦争(1877-'78)に敗れ、領土喪失と半植民地化の危機的状況に陥ったアブデュルハミト2世(在位1876-1909)の時代、国家財政は

破綻し、“エルトゥールル”など艦隊主力はイスタンブール金角湾に係留されたまま放置されていました。竣工から20年目の1885年、老朽化した“エルトゥールル”はイスタンブールの帝立造船所で改装・修理を受けています。そして1888年、オスマン海軍練習艦となったのち、1889年7月14日、明治天皇への親書をたずさえ、遙か遠く日本へ向け出航しました。



イスタンブール金角湾に係留され、運用中止の状態と思われる“エルトゥールル”
撮影:1884年ごろ
提供:イسلام歴史芸術文化センター(IRICA)写真史料保管所



イスタンブールで日本派遣の準備が整ったころの“エルトゥールル”
撮影:1889年
提供:高橋忠久氏



“エルトゥールル”帆走時の精密側面イラスト
このイラストは“エルトゥールル”が機関やスクリュープロペラなどを搭載する前の姿を描いたものです。船尾にはトルコ国旗が掲げられています。

作画:西村慶明(©MUSEUM OF MARITIME SCIENCE 2010)



“エルトゥールル”汽走時の精密側面イラスト
このイラストは“エルトゥールル”が機関を搭載した後、帆を畳んで汽走している姿を描いたものです。日本へ向かう途上、機関航行の石炭が底をついてしまい、本国からの送金と風待ちのため、シンガポールで4ヵ月あまり停泊しました。

作画:西村慶明(©MUSEUM OF MARITIME SCIENCE 2010)

艦種	木造フリゲート	馬力(IHP)	2,200馬力	備砲	15cmクルップ砲	8門
長さ(船首飾~船尾端)	79.2メートル	ボイラー	2基		15cmアームストロング砲	5門
長さ(垂線間長)	76.2メートル	推進装置	スクリュープロペラ 1基		6cmクルップ砲	4門
幅(水線最大幅)	15.1メートル	速力	10ノット(時速18.52km)		24.5cmホチキス砲	2門
深さ	7.1メートル	搭載燃料	石炭350トン		24.5cmノルデンフェルト砲	2門
大きさ(bmtン)	2,344bmtン	乗組員数	400人		45.5cm魚雷発射管	1門
帆装置	3本マスト、シップ型	船材	木		ホワイトヘッド式魚雷	2発 (1888年現在)
蒸気機関	2シリンダ直動機関 1基 レイブンヒル&サルケルド製	起工	1855年	竣工	1865年 2月	
		進水	1863年10月19日	建造所	イスタンブール タシュクザク造船所	

典拠:『The Ottoman Steam Navy 1828-1923』, London, 1995

What kind of people got on "Ertugrul"? “エルトゥールル”には どんな人々が乗っていたのか?

オスマン海軍練習艦“エルトゥールル”には、海軍大臣の娘婿で英語・フランス語に堪能なオスマン・パシヤ少将を使節団の特使とし、艦長にアリー・ベイ大佐、副長にジェミル・ベイ大佐が任命され、20名編成の軍楽隊をはじめ、海軍兵学校修了生多数を同行させるなど総乗組員は600余名にのぼったといわれています。

※「土耳古國軍艦遭難追悼記」では乗員数650名であったとされています。



“エルトゥールル”乗組の将校(各将校の名前が台紙に記入されています)。
提供:駐日トルコ共和国大使館



トラブル続きの日本派遣航海

1889年7月に出航した“エルトゥールル”は、翌1890年6月になって横浜に到着しました。当初、6ヵ月の予定だった航海は災難続きで、出航2週間目にはスエズ運河通過中に舵と舵軸を損傷して2ヵ月を費やし、シンガポールに到着したときには日程超過で季節風は止み、石炭も底をついたため、本国からの送金と風待ちで4ヵ月の滞在を余儀なくされたのです。本国を發って横浜に着いたのは11ヵ月後のことでした。

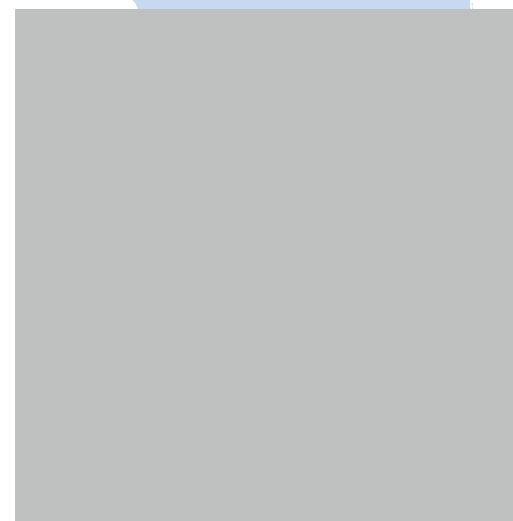
日本へ向かう“エルトゥールル”
画:オスマン・ヌリ提督(1839-1906)
所蔵:イスタンブル海軍博物館



特使 海軍少将オスマン・パシヤ
(1858-90)
提供:串本町トルコ記念館



“エルトゥールル”乗組員 提供:串本町トルコ記念館

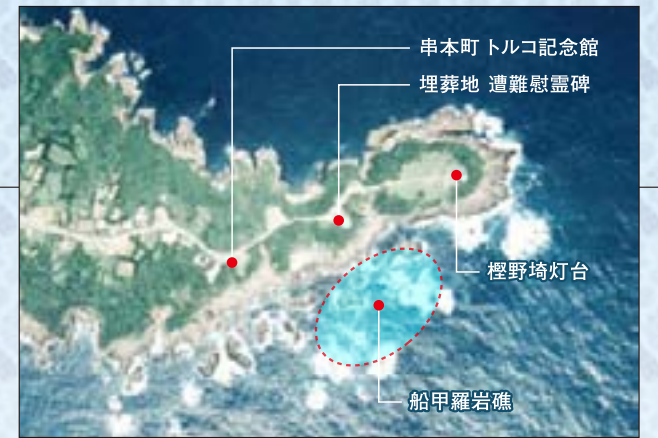


“エルトゥールル”で明治天皇に届けられたトルコ宮廷刺繍の
テーブルクロス「紫天鷲絨地花文刺繍卓袱」(199.8×197.3cm)
提供:宮内庁三の丸尚蔵館

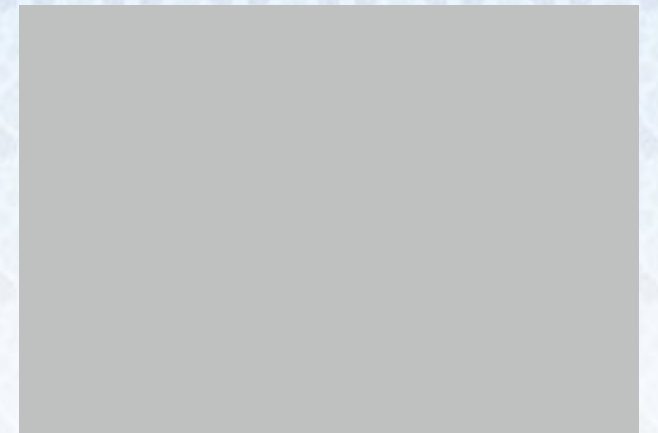
The tragedy of “Ertugrul”の遭難

明治天皇に拝謁してアブデュルハミト2世の親書・勲章などを奉呈し、大役を果たした特使オスマン・パシヤ一行には過酷な運命が待ち受けていました。まず当時日本で猛威を振っていたコレラが艦内に蔓延して11人が死亡し、検疫のため長期間足止めされてしまいます。本国からは帰国の催促が相次いでいました。ようやく出航準備が整ったのは9月。日本の台風シーズンでしたが、危険と知りながら1890(明治23)年9月15日正午、“エルトゥールル”は横浜を出航し、神戸へと船を進めました。

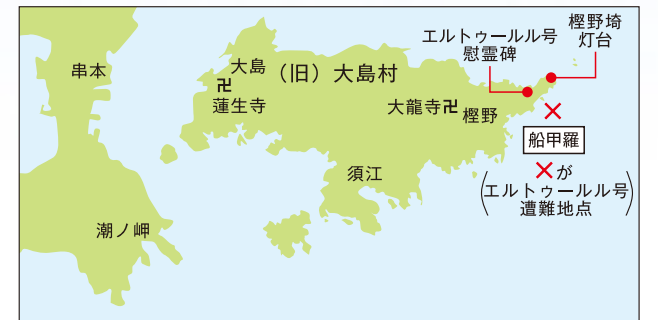
翌16日夜9時頃、“エルトゥールル”は紀伊半島付近で暴風雨に遭遇してしまいます。旧大島村の檜野埼灯台付近(現・和歌山県串本町)で座礁、沈没し、オスマン・パシヤ以下600余名が犠牲となる大惨事になりました。



遭難現場付近の空撮写真



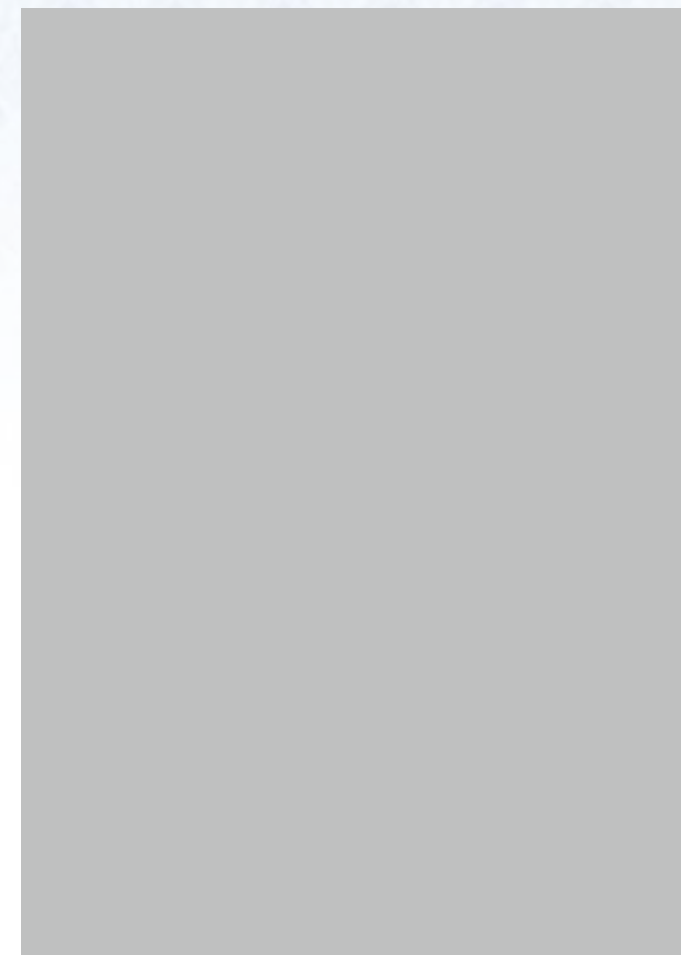
「土國軍艦エルトグロウ号難破ヶ所見取概略」
(『明治二四年 公文備考 艦船部 下巻五』)
提供:防衛省防衛研究所図書館



旧大島村と檜野崎



檜野埼燈台 明治3(1870)年7月8日に点灯
設計はR.H.ブランドン『鹿鳴館旧蔵写真帖』より



“エルトゥールル”遭難当時の天気図(明治23年9月16日午後9時)
四国沖には熱帯性低気圧(750mmHg=999.9hpa)が発達しており、同日4時半頃には房総半島から四国まで暴風警報が出されていました。
「×」印が遭難地点。
※3桁の数字は気圧を示す仏厘(mm)水銀柱、2桁の数字が気温
提供:気象庁

The rescue and memorial service by Kushimoto people

串本の人たちによる救助と慰霊

遭難現場近くの旧大島村(現・和歌山県串本町)の人びとは、嵐のなか漂着した傷だらけで着衣はなく、言葉も通じない外国人に驚きつつも、「拳村一致協力、日夜寝食を忘れて奔走」し、救助、介護にあたりました。大島村では貴重な食料であった畑のイモや非常食用の鶏、衣類も惜しむことなく提供されました。遺体の搜索も並行して行われ、丁寧に檜野崎に葬られました。日本全国からは多くの

義援金、物資が遭難したトルコ人乗員のために届けられました。生存者69名はその後神戸に移送され、明治天皇からは彼らのために侍医が派遣されました。



②



③



①

50年後の証言

元“エルトゥールル”乗組員・アフメット・エルキッシュ老(事故当時25歳)の回想

『エルトグルル』は9月14日、横浜を出帆、イスタンブルに向かった。そして、それから2日目、わたらの艦は熊野灘にさしかかった。……朝からその日は風がはげしかった。海がものすごく荒れていた。わたらの木造艦は怒濤の山に揉まれぬき、とうとう進退の自由を失った。……突如メリメリッと大きな音がした。艦は船甲羅の岩礁にのりあげた。船は真二つに両断され、みるみるわたらは荒れ狂う魔海の餌食となるのをどうにも手のほどこしようがなかった。わたしのそばに艦の難破木片が浮いていた。わたしは夢中でしがみついていた。……そして遂にわたしはたすかったんだ。心身ともにヘトヘトにつかれ、ようやく日本の檜野崎の海岸に辿りついた……。他の同僚と一緒に。



談話を掲載したトルコ有力半官紙『ウルス』とアフメット・エルキッシュ老

The survivor's return to homeland, Turkey by H.I.J.M.S. "Hiyei" and "Kongo"

生存者を故国トルコへ～“比叡”“金剛”による送還～

生存者69名は、日本海軍の練習艦隊“比叡”“金剛”によって本国・トルコへの送り届けられることになりました。事故から約1ヵ月が経過した10月11日、神戸で生存者を乗せた両艦は、約80日間の遠洋航海を経てイスタンブルの手前、ユケリ湾でオスマン海軍軍艦“タリヤ(Talia)”に引き渡しました。そしてオスマン朝の特別許可を得て1891年1月2日、イスタンブル入港を果たし、熱烈な歓待を受けました。この「エルトゥールル号事件」は、日本とトルコの友好のシンボルとして太平洋戦争前までは語り継がれていました。

- ① “比叡”の日本～トルコ間航跡図「軍艦比叡土耳其國航行航跡図」(『明治二四年 公文備考 艦船部 下巻五』) 提供:防衛省防衛研究所図書館
- ② 生存者をトルコへ送り届けた日本海軍巡洋艦“金剛” 撮影地:イスタンブル、フンドゥックル前 1891年 提供:IRCICA写真史料保管所
- ③ イスタンブルに到着した日本海軍巡洋艦“比叡” 撮影地:イスタンブル、カバタシュ前 1891年 提供:IRCICA写真史料保管所
- ④ イュル杜ッス宮殿で催された“比叡”“金剛”乗組員の歓迎晩餐会 1891年 提供:駐日トルコ共和国大使館

①



②



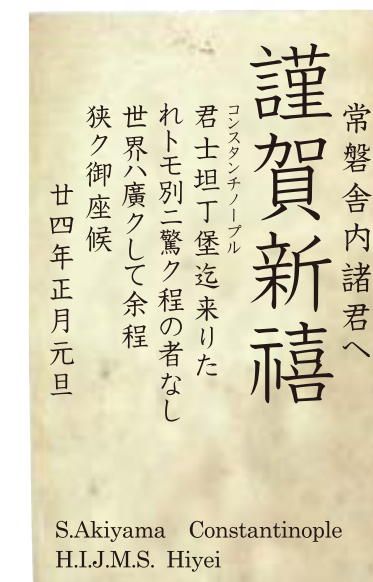
③



④

Postcard from Constantinople (Istanbul), Turkey

コンスタンチノーブルからの便り 秋山真之海軍少尉候補生



“エルトゥールル”生存者を母国トルコまで送還した日本海軍練習艦隊の“比叡”には、のちに日露戦争の日本海海戦で連合艦隊作戦参謀をつとめる秋山真之(1868-1918)も少尉候補生として乗り組んでいました。秋山は、病を患って文学活動が思うようにならない友・正岡子規(1867-1902)を気遣う励ましの句を遠い異国の地コンスタンチノーブル(現在のトルコ・イスタンブル)から届けています。



連合艦隊参謀時代の秋山真之の海軍中佐

コンスタンチノーブルに滞在中の秋山真之が東京の正岡子規に送った書簡 提供・出典:松山市立子規記念博物館
「コンスタンチノーブル(イスタンブル)まで来たが、別に驚く程のものはない世界は広くしてよほど狭くござ候」と記しています。

※常磐舎…旧松山藩主久松家が資金を出して設立した育英団体「常磐会」の寄宿舎で、当時、正岡子規もここで生活していました。(東京都文京区本郷4-10-13)



1891年にコンスタンチノーブルで撮影された海軍少尉候補生時代の秋山真之(22歳) 提供・出典:坂の上の雲ミュージアム

The shipwreck of "Ertugrul" and Japan, carried by the textbook of Turkey

トルコの教科書に紹介されている「エルトゥールル号事件」と日本

“エルトゥールル”遭難と救助にはじまる日本・トルコ交流については、トルコの小学校教科書に掲載され、トルコでは多くの人々が「エルトゥールル号事件」そして日本のことを学校で勉強しています。

小学校社会科教科書 5年生



なんと書いてあるのかというところ...

翻訳：広瀬徹也氏

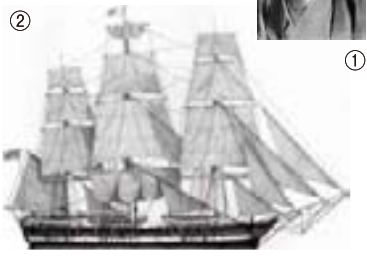
Case studies of international exchanges began with the sea rescue

海難救助から芽生えた国際交流

“エルトゥールル”遭難と救助から始まった日本とトルコとの友好関係のほかにも、海難救助がきっかけで芽生えた国際交流がありました。

ジョン万次郎とアメリカ ~1841(天保12)年漂流~

1841年正月、土佐国中ノ浜(現・高知県土佐清水市)の万次郎、伝蔵ら4名が乗った漁船が暴風で太平洋を漂流し、鳥島に漂流。半年後、万次郎はアメリカ捕鯨船「ジョン・ハウランド」船長ホイットフィールドに救助され「ジョン・マン」の愛称をつけられ、アメリカに渡り、小学校教育、英語・数学・測量・航海術・造船技術教育を受けます。のちに琉球に渡り、土佐藩へと帰郷した万次郎は、中濱の姓を受け、藩士に英学を教授、幕府軍艦操練所教授方、「咸臨丸」通弁主任などを務め、のちに開成学校教授となるなど、新しい知識と技術を日本へともたらし、日米の架け橋となる幾多の業績を残しています。



① 中濱万次郎(ジョン・万次郎、1827-98) 提供:中濱 博氏
② 万次郎を救助したアメリカ捕鯨船「ジョン・ハウランド」

“若宮丸”仙台沖から漂流し、1793(寛政5)年アリューシャン列島に漂着~ロシア

1793年11月、“若宮丸”(800石積)が陸奥国石巻(現・宮城県石巻市)から江戸へ向けて出帆したところ、福島磐城沖で暴風に遭遇し、アリューシャン列島アッカ島に漂着。生き残った水手の津太夫以下15人は、ロシア貿易商人に救助され、1803(享和3)年、首都ペテルブルグでロシア皇帝に謁見し、津太夫ら4名はロシアに帰化し、通訳となった善六とともに使節レザノフに伴われ、翌1804(文化元)年9月、長崎に帰国しました。



③



④ “若宮丸”の遭難供養碑 善昌寺(石巻市山下町)
④ 「魯西亜船入津図」『環海異聞』当館蔵

スペイン船“サン・フランシスコ”の御宿漂着と救助 ~1609(慶長14)年~

1609年9月、スペイン領フィリピン総監ドン・ロドリゴを乗せた“サン・フランシスコ”ら3隻が台風遭遇し漂流、上総国岩和田村(現・千葉県御宿町)の海岸に座礁難破しました。岩和田村民は総出で救助にあたり、乗組員373名中、317名が救出されました。その後、徳川家康の指示でウィリアム・アダムス(三浦按針)が建造したガレオン船が翌年贈られ、無事メキシコへ到着しています。これをきっかけに日本とスペイン・メキシコとの交流が始まりました。



⑤ 昭和3年に建立された日西墨三国交際発祥記念碑(メキシコ記念塔、千葉県御宿町)



⑥ “サン・フランシスコ”乗組員が漂着・救助された田尻海岸(現・千葉県御宿町)

The rescue Japanese residents in Iran by Turkish Airlines during the Iran-Iraq War

イラン・イラク戦争時の邦人救出機派遣

イラン・イラク戦争開戦から5年後の1985年3月17日、サダム・フセイン前イラク大統領は「1985年3月19日以降、イラン領空を通過する航空機は、民間機であっても撃墜する」との声明を発し、イランへ自国機の乗り入れがない日本人だけが取り残されていました。タイムリミットが迫る中、駆けつけてくれたのはトルコ航空機でした。そして日本の人々は、この救出劇が95年前、“エルトゥールル”

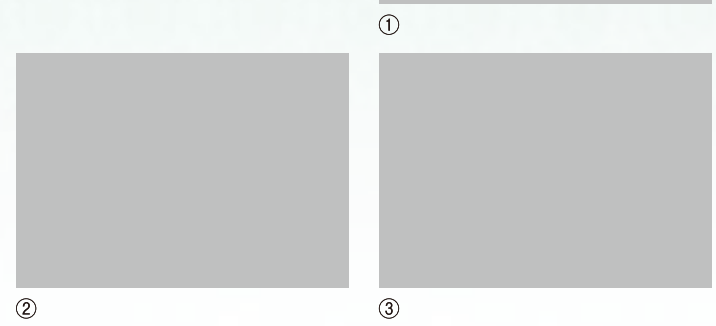
の受けた恩に対するトルコ側の返礼であったことを駐日トルコ大使から伝えられます。こうして長らく日本人の記憶から遠ざかっていた“エルトゥールル”の名があらためて刻まれたのです。

トルコ航空、邦人救出にかんする記事 『産経新聞』 1985(昭和60)年3月20日 日刊

Japanese support for Northwestern Turkey Earthquake in 1999 ~Chain of good will and good intentions~

トルコ北西部地震時の日本からの支援

1999年8月17日、トルコ北西部イズミット市周辺でマグニチュード7.4という巨大地震が発生しました(デズジェ市では11月12日にM7.2の地震)。死者1万7,262人、負傷者4万3,953人('99.11.16現在)というトルコが経験した20世紀最大の地震に対し、真っ先に動き出したのはトルコ航空機で救出された人々でした。そして日本政府も各国に先駆けて緊急物資・無償援助の提供を決定し、国際緊急援助隊が地震発生当日に日本を発ちました。兵庫県からは阪神淡路大震災で被災者が使用していた仮設住宅約1,900戸がトルコ政府に無償提供されています。日本財団もトルコの地震被害に対し、緊急災害援助の資金協力と復興支援を行いました。120年前の“エルトゥールル”の時代から、日本とトルコの利害を越えた友好関係は、いまなお続いているのです。



① 神戸港で兵庫県が無償提供する仮設住宅を積み込む輸送艦“おおすみ” 1999年9月
② トルコへの緊急物資を輸送する輸送艦“おおすみ”(右)と補給艦“ときわ”(左) 1999年9月
③ 被災地トルコでの熱烈歓迎 1999年10月 以上提供:海上自衛隊

The present friendship and exchanges between Japan and Turkey

現代の日本・トルコ交流事業

ODA事業ほか日本からの協力で建設された施設

1. ボスポラス海峡横断鉄道トンネル工事 (マルマライプロジェクト)

アジア大陸とヨーロッパ大陸とを隔てるボスポラス海峡をトンネルで結ぶ大プロジェクト(ODAプロジェクト)で、2004年8月27日に着工しました。速く複雑な潮流の海峡下で、「150年前のトルコの人たちの夢」ヨーロッパ(シルケジ駅)とアジア(ウシュクダル駅)とをつなぐ海底トンネル完成のためには、とても高い技術が必要となっています。2010年2月17日には、海中トンネルと地中トンネルが結ばれました。



アジア側の巨大なシールドマシン(TBM)がウシュクダル駅に到達 2009年7月



アジア側のシールドマシン(TBM)と沈埋面の接合 2010年4月
提供:大成建設株式会社 国際支店

2. カマン・カレホック考古学博物館

「鉄=ヒッタイト」という定説を覆す世界最古(紀元前2000年ごろ、ヒッタイト帝国以前)の銅片がトルコ中部のカマン・カレホック遺跡から出土しました。そして2010年7月10日、遺跡を調査してきた中近東文化センター付属アナトリア考古学研究所(東京)の発掘成果を展示する「カマン・カレホック考古学博物館」が現地に開館しました。同館は日本政府の文化無償資金協力(ODA)によって建設されたものです。



全体が土に覆われた独創的な外観のカマン・カレホック考古学博物館



カマン・カレホック考古学博物館(写真中央)とアナトリア考古学研究所
提供:アナトリア考古学研究所

3. 土日基金文化センター

トルコ・日本のよりよい親睦、社会、文化および科学技術、経済などの相互交流の架け橋となるべく設立されたアンカラの土日基金(1993年設立)のセンターで、1998年5月3日に開館。456名収容可能な多目的ホール、80名用会議室、図書館、講座・学習室、宿泊施設や茶室、日本庭園などを備えています。開館以来、催しや活動が盛んに行われ、トルコにおいて日本を象徴する重要な役割を担っています。



土日基金文化センターの正面外観(完成1998年)



土日基金文化センター内にある日本庭園や茶室

4. 第2ボスポラス橋

(ファーフティフ・スルタン・メフメト橋)

イスタンブルを2つに分けるボスポラス海峡にかかる橋。第1ボスポラス橋の混雑解消を目的として、日本の円借款(1985~'87年度)により第2ボスポラス橋本体を含む37kmの高速道路が建設され、1988年に完成しました。同じ年に開通した日本の瀬戸大橋とは姉妹橋の関係です。アジアとヨーロッパを結ぶ架け橋であるだけでなく、日本とトルコとの友好の架け橋ともなっています。



アジアとヨーロッパ側のタワー建設が完了後、メインケーブル架設用のキャットウォーク(足場)設置が完成したときに「バンザイ」する日本人技師4名とトルコ人ワーカー2名 1987年1月



トルコで発行された第2ボスポラス橋の記念切手

提供:(株)IHIインフラシステム

5. ダムおよび水力発電所の建設

1970年代、トルコで急速に伸びる電力消費に対応すべくトルコ国内の豊富な水資源を水力発電に利用できるように「ハサン・ウールダム及び水力発電所計画」(完成1983年)「アルティンカヤ水力発電所計画」(完成1988年)が立てられ、日本からの資金(プロジェクト借款)と技術的援助のもと巨大なダム建設が始まりました。完成から20~30年経過した今なおトルコ国内の電力供給に貢献し続けています。



1983年に完成した、ハサン・ウールダム



1988年に完成したアルティンカヤダム
トルコの現地スタッフとともに 1975年(写真右上)

提供:森本時夫氏

List of sister cities between JAPAN and TURKEY

日本とトルコの友好姉妹都市(締結順)



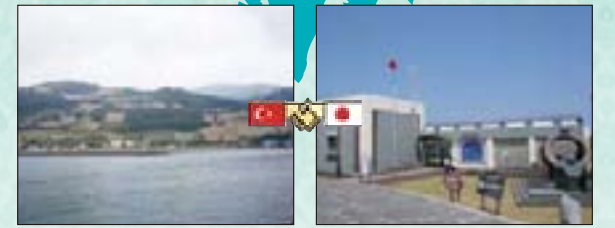
※位置の説明のために両国の縮尺が異なっています。

1964.11.11締結

① 串本町(和歌山県)とヤカケント町

1890年、「エルトゥール」が大島野野崎で遭難し、その救助に努めた串本町を、1963年にトルコ日本友好議員連盟のトルコ議員が訪れ、串本町野野崎の風景がヤカケント町に似ていたことから進展しました。

- ① 串本町野野崎によく似ているという港町ヤカケントの風景。
- ② 串本町で1974年に開館したトルコ記念館。「エルトゥール号事件」を中心とした展示がある。



①

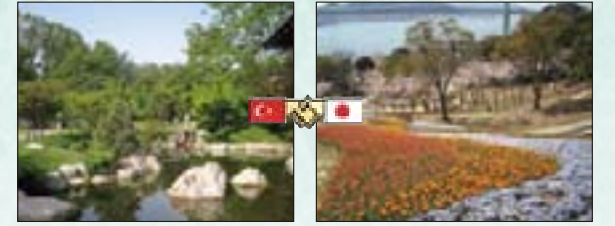
②

1972.5.16締結

② 下関市(山口県)とイスタンブル市

1968年にイスタンブル市長から日本の都市との姉妹都市提携の要望があり、外務省と国際親善都市連盟は、下関市を候補に選定。'72年に調印されました。締結後に架橋された第2ボスポラ

- ス橋により、さらに景観は類似しました。
- ① 下関市が技術支援をしたイスタンブル市内のバルタリマン日本庭園
- ② イスタンブル市から球根5万球が贈呈されたトルコチューリップ園(下関市火の山公園)



①

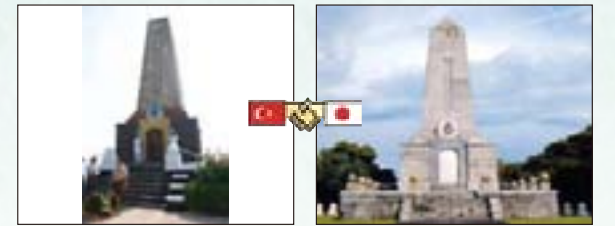
②

1975.10.8締結

③ 串本町(和歌山県)とメルシン市

1971年に串本町を訪れたトルコ共和国海軍エイジオウル総司令官が、トルコ国内に慰霊碑がないことを遺憾とし、同形状の慰霊碑を建立しました。

- ① メルシン市の遭難慰霊碑。串本町の慰霊碑と同型の碑が建立。
- ② 事故現場を見下ろす野野崎の丘に立つ「トルコ軍艦遭難慰霊碑」



①

②

1988.6.25締結

④ 寒河江市(山形県)とギレスン市

「日本一のさくらんぼの里」寒河江市と、さくらんぼ(チェリー)の原産地であるギレスン市は、さくらんぼを通して友好親善を深めようと締結されました。

- ① さくらんぼ発祥の地、ギレスン市にできた「寒河江通り」
- ② 寒河江市では、1992年にトルコ館とチェリーランドが開館。



①

②

1989.10.3締結

⑤ 砺波市(富山県)とヤロヴァ市

1988年7月、砺波市長が友好使節団の一員としてチューリップ原産国であるトルコを訪問し、「花と緑のまちづくり」を推進中であることを紹介したところ、花のまちヤロヴァ市とのあいだで友好親善交流を深めることになりました。

- ① トルコ北西部地震後、砺波市民の義援金で再建された「ヤロヴァ消防署」竣工式のようす。
- ② 450品種、100万本のチューリップがある「砺波チューリップ公園」と園内の「ヤロバの泉」。



①

②

2005.9.5締結

⑥ 渋谷区(東京都)とイスタンブル市ウスキュダル区

「日本におけるトルコ年」(2003年2月~'04年5月)をきっかけに、駐日トルコ大使館や東京ジャーミイ・トルコ文化センターがある渋谷区でトルコとの交流を深めようという気運が高まったのがきっかけで結ばれました。

- ① 2007年に「渋谷通り」と命名されたウスキュダル区の歩道。歩道中央にはサクラが植樹され、壁面には両区の友好を示すパネル展示がある。
- ② 渋谷区役所前にある記念碑「日友好の碑」。イズニック・タイルが美しい。



①

②

2007.5.10締結

⑦ 東海市(愛知県)とブルサ市ニルフェル区

2005年に開催された国際博覧会「愛・地球博」(愛知万博)において、東海市がトルコ共和国のフレンドシップ・パートナー都市となったことがきっかけとなり、姉妹都市提携を結びました。

- ① ニルフェル区スポーツクラブ・ハンドボール選手団を東海市に迎える東海市スポーツ交流事業(2009年8月27日)
- ② 東海市とブルサ市ニルフェル区との姉妹都市提携の写真(2007年5月10日)



①

②

「日本・トルコ交流のあゆみ」 高橋忠久

1 日本とトルコとの交流はいつ頃から始められたのでしょうか。それは、およそ140年前の明治時代まで遡ることができます。

1868年、新しい時代を向かえた日本は国内政治の改革を進めると共に、幕末に諸外国と締結した不平等条約を改正し新たな国際関係を樹立すべく、先ずは、1871年、岩倉具視を特命全権大使とする査察団を欧米に派遣しました。しかし、欧米は条約改正に応ずることなく交渉には進展が見られないまま、1873年、岩倉使節団は帰国の途につきます。使節団はイギリスの助言を受け、同様の問題を抱えるトルコに随員の一人であった福地源一郎を国情視察目的で派遣します。これを機にオスマン帝国と条約締結、そして国交樹立に向けての試みが開始され、両国の在外公館での接触や日本からの要人のトルコ訪問などが盛んになりますが、進展は見られませんでした。

1887年には小松宮親王殿下・同妃殿下一行がイスタンブルを訪問しますが、彼等を歓待した時のオスマン帝国皇帝スルタン、アブデュルハミト2世は、この答礼としてトルコから初の親善使節となる軍艦“エルトゥール”の日本派遣を決定します。当時、オスマン帝国ではヨーロッパ列強の圧力が日に日に増大しており、“エルトゥール”の派遣は途中寄港するイスラーム諸国にオスマン帝国の威信を誇示し列強を牽制するという重要な側面がありました。

2 1889年7月14日にイスタンブルを出航した“エルトゥール”は途中、未知の航海ということもあり様々なアクシデントに遭遇し、船体が破損する事故や暴風に見舞われるなど困難の連続でした。横浜港に到着したのは予定より相当遅れ、1年後の1890年6月7日のことでした。

日本滞在中はさしたる困難もなく、明治天皇に拝謁しスルタンの親書を奉呈するという最大の任務も無事終えることができました。ところが帰還の日時も押し寄せた矢先、当時、関東で流行していたコレラに乗組員多数が感染、10余名が亡くなるという不幸にみまわれたのです。この予期せぬ出来事で“エルトゥール”は2ヶ月余り隔離されてしまい、結局、トルコに向かって出航できたのは、1890年9月15日、台風が日本に接近しているときでした。16日、台風の影響下に入った“エルトゥール”は、暴風雨と荒れ狂う海上で激しく翻弄されたあげく、闇夜の中、和歌山県串本沖、大島の岩礁に激突し沈没してしまったのです。2ヵ月後には2年ぶりに故国の土を踏めると喜び勇んでいたであろう600人近い乗組員のうち助かったのはわずか69名にすぎませんでした。彼等は島民らの献身的な活躍により救助・看護され一命をとりとめることが出来たのです。

偶然、事故を知ったドイツ軍艦“ウォルフ”は停泊していた神戸港から直ちに事故現場に向かい、生存者たちを乗せて十分な治療が受けられる神戸へと戻ります。一方、日本国側も直ちに宮内庁の医師と職員、日本赤十字社の医師、看護師を遭難現場に派遣しますが、ドイツ軍艦による救援の連絡を受け、急遽、串本より移送されてくる生存者を神戸で迎えることになり、ドイツ軍艦が入港すると直ちに負傷者の治療、看護にあたりました。生存者たちには皇后陛下、小松宮殿下からの物資が下賜されましたが、民間人によって多くの義捐金も集められました。連日新聞で遭難事故が報道され国民の間に大きな関心をよんだ結果でした。

事故から約1ヶ月経った10月11日、生存者たちは二隻の日本軍艦“金剛”“比叡”に分乗し、ようやく神戸港からイスタンブルに向け出航します。二隻の軍艦は1891年1月2日、イスタンブルに入港しますが、乗員たちはこの事件を知った市民に歓声をもって迎えられたのでした。一行はスルタンにも拝謁しお礼の言葉を受けただけではなく、ドルマバフチェ宮殿の使用も許されました。滞在中の市内見物も「どこへ行ってもフリーパスで歓迎された」と、ある乗組員が日記に記すほどの歓迎ぶりだったようです。

イスタンブルに1ヶ月滞在し任務を終えた二隻の軍艦は1891年2月10日現地を出航し、洋上では実習訓練も実施しつつ5月10日、品川に無事帰還しました。

なお、この一連の任務には日本の海軍史上有名な人物も係わっていました。後の日露戦争で海軍参謀として日本海海戦を勝利に導いた秋山真之です。海軍兵学校卒業の少尉候補生の一人として“比叡”に乗船していたのでした。



①



②

① アブデュルハミト2世(1842-1918 在位1876-1909)
② 小松宮彰仁親王殿下(※スルタンへ献呈した直筆サイン入り写真)
撮影:1887年ベルリン イスラム歴史芸術文化センター(IRCI)写真史料保管所

3 このエルトゥールの遭難事故をきっかけに、日本からトルコに様々な立場の民間人も旅行するようになり多様な交流が生まれ発展することになります。その先陣を切ったのは、時事新報記者の野田正太郎で、新聞社が集めた義捐金をトルコに渡すべく“比叡”に乗り込んだのでした。彼はその後もトルコに留まりトルコ軍の要請により将校たちに日本語を教えています。また、1892年には個人で義捐金を集めた山田寅次郎がトルコに渡っています。彼は大阪の中村商店の三兄弟とともにイスタンブル初の日本人商店を開きますが、この店は当時ヨーロッパで持てはやされていた日本の伝統工芸品を輸入して好評を博しイスタンブルで有名になりました。ここには日本政府から派遣された官吏の他、ジャーナリスト、経済人などトルコを訪ねた多くの日本人が立ち寄り様々な便宜供与をうけていました。

1904年には日露戦争(~'05)が勃発しますが、長きに渡るトルコの宿敵ロシアと日本の戦争は人々の高い関心を集め、トルコの新聞でも連日、極東の戦況が詳細に報道されるほどでした。この戦争で日本が勝利するとトルコの人々はこれを自分たちの勝利のように受け取り、イスタンブルにあった中村商店には、日露戦争の勝利を賛辞するトルコ人が連日押しかけてきたということです。その熱狂ぶりは、日本海でロシア艦隊を撃破した海軍連合艦隊司令長官東郷平八郎大将にちなみ子供に「トーゴ」の名をつける人たちがいたことからもうかがえます。日本に関する書物も多数出版され、日本の戦勝によりトルコ人の日本に対する親近感が益々深まったといわれます。

一方、日本は日露戦争の勝利により欧米の列強諸国に認知され国際的地位もいちじるしく高まりました。幕末に締結された不平等条約も完全に撤廃され先進欧米諸国と全く対等の地位に上ることができたのです。以後、日本の産業も飛躍的に発展するに至り日本の関心は中国市場方面へと移り、その結果、トルコとの関係は薄れ条約締結交渉も停止し国交樹立は見送られてしまいました。



“エルトゥール”記念碑除幕式 1937(昭和12)年6月1日
提供:串本町トルコ記念館



オスマン海軍の洋上訓練風景

しかし、その後も、邦人のトルコ訪問は衰えることなく続き、日露戦争の日本の勝利を我が事のように喜ぶトルコ人たちの歓迎を受けていたのです。

こうして、トルコ人に好意をもって受け入れられた日本ですが、1914年に第一次世界大戦が勃発すると、トルコは同盟国側に、日本は連合国側に立って参戦することになり両国の国交が断絶に至ったのです。長年、日本・トルコ交流の拠点となってきた日本人商店も店を閉めることになり、両国の交流は一時途絶えてしまったのでした。

4 日本とトルコの関係は、1920年、戦争終結後締結されたセープル条約により連合国側の特命全権公使として内田定槌が派遣されたことにより再開されます。しかし、トルコはこの戦争によって国家分断の危機に見舞われ、ムスタファ・ケマル・パシャ(アタテュルク)の指揮下で祖国解放・独立運動が開始され、1922年にはオスマン帝国が崩壊、翌1923年、トルコ共和国が誕生します。セープル条約は破棄され、1924年、日本は新政府と改めて条約を結ぶことになり、ここにようやく国交が樹立されたのでした。

1925年3月、日本はイスタンブルに大使館を開設し、7月にはトルコが東京に領事館(1929年大使館に昇格)を開き、両国の関係は新たな局面へと入ったのでした。しかし、1945年、第二次世界大戦でトルコが連合国側に加わったことでまたもや国交が閉ざされてしまいました。幸いに両国は交戦することなく、終戦後、日本が国際社会に復帰する際にはトルコがいち早く助力してくれたのでした。

(次頁へ続く)

5 戦後の日本の復興とともに民間レベルでも両国の関係が徐々に再開されます。1950年朝鮮戦争が勃発すると、トルコも連合国の一員として派兵しますが、その間、多くのトルコ人兵士が日本を訪問しています。彼等は祖国に帰還すると、自分たちの見た日本を好意的に話し伝えたといえます。

1970年代にトルコの黒海地方で日本による巨大なダム建設(ハサンウールルダム)が開始されると経済協力や文化交流も進展します。1980年代に入ると両国の多面的な交流が益々盛んになっていきますが、そんな中、1985年、我々にとって忘れてはならない事件が起きます。イラン・イラク戦争の戦闘が激しくなった頃、イラク軍によるテヘラン市街地への爆撃が始まり、イラン領空を通過する航空機の撃墜が表明されたことから、イランに滞在する外国人の国外脱出が開始されました。パニックのうちに日本人以外の外国人は自国機で次々と脱出を図りました。しかしながら、イランへの自国機の乗り入れのない日本人だけが取り残さ

れることになったのです。危機がせまる中、様々な人々のトルコ政府への働きかけにより、日本人救出のためトルコ航空機2機の派遣が決定されました。飛行機はイラク政府が表明した攻撃最終通告日に飛ぶことになり極めて危険なフライトでしたが、その時の機長オルハンさんは「我々はお客様を安全に運ぶのが使命であるから、国籍は問わない。救出できたのが日本人であったのがさらによかった」と語っています。

トルコは親日的な国として知られていますが、私たちは「なぜトルコ人は日本に好意をもってくれるのか」と気にかけたことがあったのでしょうか。今年は、トルコ初の親善使節軍艦“エルトゥールル”来日120周年にあたります。この機会に両国の友好関係をあらためて見つめなおしていただければ幸いです。

(東洋大学アジア文化研究所 客員研究員)

日本財団によるケマル・アタテュルク像の修復と設置について

本年6月3日、三笠宮寛仁親王殿下、三笠宮彬子女王殿下ご来臨のもと、トルコ建国の父であるムスタファ・ケマル・アタテュルク初代大統領(1881-1938)の銅像が、日本とトルコ友好の地・和歌山県串本町に設置され、除幕式が行われました。

アタテュルク像は、1996年、新潟県柏崎市に第3セクター方式で開設された「トルコ村」にトルコ政府から寄贈されたものですが、2004年の新潟県中越地震で大被害を受けトルコ村は閉鎖となり、銅像は3年間以上横に寝かせた状態で保管されていました。

トルコの偉大な英雄の像の斯様な状況には、柏崎市民はじめ日本の多くの識者の心を痛めていました。そこで日本財団笹川陽平会長の働き掛けにより、調査と交渉を重ねた結果、駐日トルコ共和国大使館へ一旦返還する

ことができました。セリム・セルメット・アタジャンル駐日特命全権大使には迅速にご対応いただき、「エルトゥールル」が遭難し、日本・トルコ両国が友好を温めてきた地である串本町(田嶋勝正町長)に、銅像の受け入れを快諾いただきました。

銅像の輸送にあたっては、芸術性を損なわないよう分割せず、特殊車両による深夜輸送を採用しました。まず東京の船の科学館へ移送・修復の上、無事、串本町榎野埼灯台広場に設置することができました。



修復作業が行われた船の科学館



串本町における除幕式の様子



トルコ大使より感謝状を受ける日本財団笹川会長(左)

展示品リスト

資料名	制作	制作年	材質	所蔵先
軍艦“エルトゥールル”模型	—	—	木	串本町トルコ記念館
“エルトゥールル”遺品(把手付き石材)	—	—	石・鉄	串本町トルコ記念館
“エルトゥールル”遺品(滑車)	—	—	青銅	串本町トルコ記念館
“エルトゥールル”遺品(薬莢)	—	—	金属	串本町トルコ記念館
“エルトゥールル”遺品(銃剣ハンドル部)	—	—	—	串本町トルコ記念館
“エルトゥールル”遺品(蛇口)	—	—	青銅	串本町トルコ記念館
“エルトゥールル”遺品(手提ランプ底面)	—	—	—	串本町トルコ記念館
“エルトゥールル”遺品(鍋)	—	—	青銅	串本町トルコ記念館
“エルトゥールル”遺品(砲弾)	—	—	鉄	串本町トルコ記念館
“エルトゥールル”遺品(滑車・木軸付き)	—	—	青銅	串本町トルコ記念館
“エルトゥールル”遺品(把手)	—	—	青銅	串本町トルコ記念館
“エルトゥールル”遺品(釘)	—	—	青銅	串本町トルコ記念館
“エルトゥールル”遺品(陶片)	—	—	陶磁器	串本町トルコ記念館
“エルトゥールル”遺品(旗竿部品カ)	—	—	青銅	串本町トルコ記念館
“エルトゥールル”遺品(釘、部分)	—	—	青銅	串本町トルコ記念館
“エルトゥールル”遺品(ガラス器)	—	—	ガラス	串本町トルコ記念館
土古國軍艦エルトグロール遭難追悼記	社団法人日土貿易協會	1929	—	当館
SOSYAL BİLGİLER(トルコの小学校5年生社会科教科書)	—	2009	—	個人蔵
写真週報 第68号 新興トルコ	内閣情報部	1939	—	個人蔵
日本・トルコ友好100周年記念切手	トルコ共和国	1990	—	個人蔵
第2ボスボラス橋架橋記念切手シート	トルコ共和国	1988	—	個人蔵
南北備讃瀬戸大橋記念切手シート	トルコ共和国	1988	—	個人蔵
日本・トルコ友好120周年記念切手シート	串本郵便局・日本郵便串本支店	2010	—	個人蔵

おもな展示資料写真



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦

- ① 軍艦“エルトゥールル”模型
- ② “エルトゥールル”遺品(鍋)
- ③ “エルトゥールル”遺品(陶片)
- ④ “エルトゥールル”遺品(把手)
- ⑤ “エルトゥールル”遺品(砲弾)
- ⑥ “エルトゥールル”遺品(滑車・木軸付き)
- ⑦ “エルトゥールル”遺品(釘)

所蔵:串本町トルコ記念館

御協力者一覧(敬称略 順不同)

本展開催のため、御協力頂きました関係各位に厚くお礼申し上げます。

駐日トルコ共和国大使館	和歌山県串本町
串本町トルコ記念館	山口県下関市
宮内庁三の丸尚蔵館	山形県寒河江市
防衛省防衛研究所図書館	富山県砺波市
海上自衛隊	東京都渋谷区
気象庁	愛知県東海市
アナトリア考古学研究所	大成建設株式会社国際支店
東京工芸大学	株式会社IHIインフラシステム
松山市立子規記念博物館	産経新聞社
松山市立坂の上の雲ミュージアム	ダイバー株式会社『月刊ダイバー』

セリム・セルメット・アタジャンル駐日トルコ共和国大使
赤木正和 石丸耕一 上田一樹 岡村征夫 仙石節子 高橋忠久 徳永佳世 中濱 博
広瀬徹也 ファーティ・オゼリ 堀口 暢 三沢伸生 水谷和代 森本時夫 吉川有二

日本・トルコ友好120周年記念

企画展

海が結んだ日本とトルコ

～軍艦“エルトゥールル”の遭難事故から～

2010年8月7日(土)～9月23日(木・祝)

編集・発行 (財)日本海事科学振興財団 船の科学館
〒135-8587 東京都品川区東八潮3番1号
Tel 03-5500-1111 Fax 03-5500-1190
URL <http://www.funokagakukan.or.jp>

発行日 2010年8月7日発行
印刷 株式会社 タイヨーグラフィック

© MUSEUM OF MARITIME SCIENCE 2010